

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23652034

研究課題名（和文） 町田嘉章の民謡調査にみる民謡調査史の基礎的研究

研究課題名（英文） The Historical Study of the Folksong Research in Japan: Kasho Machida's Research and his Field Notes

## 研究代表者

島添 貴美子 (SHIMAZOE Kimiko)

富山大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：00432120

研究成果の概要（和文）：本研究は、町田嘉章（佳聲）の民謡調査を取り上げ、戦前から戦後にかけての民謡研究の状況を明らかにすることを目的とし、未整理だった町田の遺稿の複写と整理を行った。町田嘉章（佳聲）（1888-1981）は日本民謡の調査者であるとともに、新民謡の作曲家、邦楽評論家としても活躍した人物である。彼の遺稿のうち戦前の採集手帳と町田が編纂した出版物を照合し、町田の初期の民謡調査の足跡を分析した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to research and analyze the folk song studies in Japan focusing on the collection of Kasho Machida's posthumous works. Kasho Machida (1888-1981) was a field worker of the Japanese folk songs, a composer of new Japanese folk songs, and a critical writer of Japanese traditional music. By digitalize all of his posthumous, and checking the data on his field notes against the publications edited by him, the process of the Machida's field works especially prior to the WWII became revealed.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：音楽学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：民謡、民謡調査、町田嘉章、フィールドノート、新日本音楽運動

## 1. 研究開始当初の背景

この数年の間、民俗学や音楽学において取り上げられてきた「民謡」とは全く異なる歌が、「民謡」と言われていたことが「発見」されている。いわゆる俗謡、はやり唄、歌謡曲などとも言われたこうした歌が、戦前の日本では「民謡」と呼ばれていたという事実は、放送メディアや観光の産物としての「○○音頭」といった「ご当地ソング」の創作といった状況と切り離すことができない。

このことは、90年代から起こった過去の民謡や民俗芸能研究の見直しとも関連している。初期にみられる批判的な見直しを経て、メディアに注目した柳田國男の民謡観や柳

田國男の民謡研究の手法といった歴代の研究者の研究の見直しへと展開している。本研究で取り上げた町田嘉章（佳聲）についての研究もここ数年の間に見られるようになった。

メディアや観光の産物としての「民謡」の研究と、柳田以降の民俗学や歌謡研究における民謡研究の見直しは、現代における歴史の再解釈の試みである。本研究もこうした歴史の再解釈の流れに位置づけられる。

## 2. 研究の目的

本研究で取り上げた町田嘉章（佳聲）は『日

本民謡大観』の編著者として知られるが、民謡調査を手がけたのは 50 才を過ぎてからに過ぎない。しかし、20 代より、新聞社や NHK に勤め、長唄を主とした邦楽評論やラジオの邦楽番組を手がけ、北原白秋らと組んで「ちゃっきり節」を代表とする新民謡を数多く作曲してきた。いわゆる土着の民謡とメディアの民謡の両方を熟知した数少ない人物である。彼の残した資料の量は民謡だけでも膨大であり、未整理なものも数多い。

そこで本研究では、特に、町田嘉章（佳聲）の民謡調査を取り上げて、戦前から戦後にかけての民謡研究の状況を明らかにし、再評価することを目的とした。町田を取り上げるにあたって、特に、以下の 3 点に注目した。一つ目は、明治生まれの町田のもつ感覚を推し量りながら、言動を「正しく」読み取ること、そのためには、その時代の背景を知る必要がある。二つ目は、町田がどのような歌を民謡として採集したのか、三つ目は収集した民謡をどのように整理し、何を明らかにしようとしたか、である。

### 3. 研究の方法

#### (1) 一次資料の収集

町田の採集手帳および、未整理の草稿・楽譜・手紙等の撮影、出版原稿の複写を行った。幸運なことに、町田の民謡調査をたどるにあたり、町田の蔵書を管理・公開している(財)日本民謡協会の協力を得て、町田の資料を閲覧、撮影することができた。

#### (2) 収集した資料のリスト化

次に、町田の民謡採集手帳をもとに、フィールドワークの旅程と行動と採集曲を整理し、それらを町田が編纂した出版物との整理・照合作業を行った。今回、整理した資料は下記の 2 点である。

①民謡採集手帳のうち戦前分の民謡調査の旅程、採集曲、そのほかの情報のリスト化

②町田が編纂した『日本民謡集成』(全 300 曲)と『日本民謡大観』(全 9 巻の一部)の収録曲、その他の情報のリスト化

#### (3) リスト化資料の照合

リスト化した情報のうち、昭和 14 年から 16 年分を照合し、一次資料(採集手帳)がどの程度、どのように二次資料(『日本民謡集成』等の出版物)で整理・分類されていたかを確認した。

#### (4) 音階理論と音階の分布

町田の民謡調査の成果の一つは、音組織論(音階論)の構築である。そこで、町田の音

組織論を中心に、同時代を生きた音楽学者や作曲家による音組織論の歴史的に位置づけた。

#### (5) 音響資料の所在調査とデジタル化の可能性

町田の民謡調査は、音(=レコード)抜きには語るができない。しかし、その多くは SP 盤やオープンリールで記録されており、どのような音源がどこに存在するか、不明な部分が多い。そこで、音資料の所在の確認とデジタル化の可能性を検討した。

### 4. 研究成果

(1)の成果に基づいて、(2)と(3)についてそれぞれ論考を出版した。

#### (1) (財)日本民謡協会蔵の町田遺稿の量と内容

デジタルファイルは、最終的に約 2 万枚以上となった。その内容は大別すると下記のとおりである。収集・整理の結果、民謡調査に関わるものだけでなく、戦前の新日本音楽運動に関わるものや、邦楽評論に関わるものまで多岐にわたっていることが分かった。

また、町田の伝記によると、第二次世界大戦時の空襲で多くの資料が消失したとされているが、未整理資料の調査の結果、戦前の資料の一部を発見した。発見された戦前の資料を今後、吟味することによって、町田の戦前の調査の状況がさらに明らかになると思われる。

#### ①民謡採集手帳

町田は民謡のフィールドワークを「民謡採集旅行」と称し、その際に携帯したフィールドノートに「民謡採集手帳」と言っている。民謡採集手帳は昭和 14 年から昭和 47 年までの期間で 25 冊確認した。手帳には、民謡調査の旅程や採集した歌詞、調査に関わった協力者、助言者たちの氏名などが、丁寧に記録されている。

#### ②草稿・資料

『日本民謡大観』の草稿や民謡採集旅行で使用したと思われる地図、アイデアノート、写真なども相当数保管されていた。

#### ③楽譜

町田の未整理遺稿の調査の過程で、大量の楽譜が出てきた。これには、『日本民謡大観』等で使用したとみられる民謡の採譜と、町田や同時代人が作曲した新民謡の草稿の 2 種類がある。これらは、戦前の新日本音楽運動において、作曲家が日本民謡を採譜することで、新しい音楽をつくる参考に使っていた痕跡と

いえる。

#### ④邦楽関係資料

主に三味線音楽関連の資料が存在することが明らかになった。

#### (2)町田の初期の民謡調査の特徴

採集手帳から、町田の民謡調査は大きく三つの時期に大別できることがわかった。初期は1937年から1940年にかけてのもので、各地の放送局や役場のつてを頼りながらの単独調査であった。中期は1941年から1951年にかけてのもので、NHKの委嘱による『大観』編纂のための基礎調査である。1952年以降の後期は、『大観』編纂のための補足調査と考えられる。

初期の調査成果は、町田が収集したSPレコード音源と併せて1940年に『日本民謡集成』として、一旦、整理され発表されている。また、初期の調査の採集手帳は中後期に比べて記録の取り方が非常に丁寧である。そこで、町田の採集手帳と『集成』のデータを照合しながら、町田の調査スタイルと資料の整理・分析方法に焦点を絞り、いわば『日本民謡大観』前夜というべき町田の初期の民謡調査の軌跡を辿ることができた。

初期の調査と『集成』にみられる分析方法から下記の2点が明らかになった。

#### ①柳田國男の民謡分類案の修正

柳田國男が「民謡分類案」を発表した1936年当時は、まだ、町田の民謡採集旅行は始まっておらず、日本の民謡の全体像が掴めたとするには程遠い時代であった。限られた情報に基づいて考案された柳田の民謡分類案は、町田の民謡採集旅行による成果によって修正され、さらに細分化された。町田が修正した分類は、その後の民謡調査の分類法に反映されていく。

#### ②名称の付け替え

初期の調査当時、歌といえば俗曲（流行歌一はやりうた）だという意識が人々の間にはあった。そのため、町田が意識して採集した労作唄（仕事歌）は、そもそも当事者にそれが歌であるという意識がなく、したがって歌の名称がないということは珍しくない。それにもかかわらず、町田の採集手帳に記録された採集曲には必ず名称が付いている。現地での通称か、町田の命名かの区別はつかない。しかし、採集手帳と『日本民謡集成』を照合すると、『集成』に編纂される段階で別の名称に変えられているものがみられた。その多くの場合、名称が変えられた理由は不明である。ただ、現時点で理由が明らかなものについていえば、柳田の民謡分類案に基づいて資料を整理するためには、当然、歌を分類しな

ければならず、歌を分類項目に当てはめるために、意図的に名称を付け直した、ということである。

#### ③面としての仕事歌の分布

町田にとって、陽旋と陰旋の分布とともに、歌の分布は重要で、『日本民謡集成』には各ジャンルの歌の分布図が載せられている。戦後の民謡調査（小泉文夫と東京藝術大学民族音楽ゼミナールや文化庁の民謡緊急調査など）では、演唱者Aの現住所、あるいは出身地をもとに市町村単位や字単位で、伝承の地理的範囲を想定しているが、戦前の交通事情や情報の蓄積、そして町田単独の採集旅行ではそこまでの悉皆調査は不可能である。そこで、町田が想定したのは、近世の藩政における「国」の単位である。町田自身、「最小限度一國一曲主義」で集めるのが目標だったようで、その結果、たとえば、福岡県の北部に田植唄が一曲でも見つかり、筑前には田植唄がある、という具合に、一種の国取りゲームのように国単位で分布図を描いている。このように町田は歌の採集地を、ある地点（点）ではなく、ある地域（面）と考えていた。そして、その「面」は、都道府県単位では大きすぎるが、市町村単位では数が多すぎて単独調査が不可能であることを考えると、「国」単位での「面」の認識は現実的・実用的だったと思われる。

#### (3)町田と藤井清水の音組織論の歴史的位置づけ

町田は、本格的な民謡調査に着手した当初より、民謡の音の中でも使用される音の高さと音同士の関係（ここでは「音組織論」と総称する）についての理論化を試みていた。町田の音組織論は1940年の『日本民謡集成』を皮切りに展開したが、藤井清水の死去を境に、町田の関心は伝播論へうつり、『日本民謡大観 東北篇』（1955年）以降、町田の音組織論についての発言はほとんど影をひそめてしまう。藤井清水は、作曲家であると同時に、初期の『日本民謡大観』編纂事業において採譜作業を担った民謡研究家で、町田の民謡研究における最初の「相棒」であった。そこで、町田と藤井の音組織論をとりあげ、上行音（形）・下行音（形）および宮音の2点に焦点をあてて、その展開を追った。その結果、町田と藤井には若干の見解の相違はあるものの、互いの論を吸収しながら二人で展開していったことが明らかになった。また、日本の民謡研究の歴史において、町田・藤井理論は、上原の『俗楽旋律考』以来の音組織論の延長上に位置づけられるとともに、小泉理論への橋渡しの役割を果たしたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計 2 件)

(1) 島添貴美子 『日本民謡大観』前夜：町田嘉章の初期の民謡調査」、細川周平編著『民謡からみた世界音楽：うたの地脈』、京都：ミネルヴァ書房、2012年、121-137頁。

(2) 島添貴美子 「町田嘉章と藤井清水の音組織論：上原六四郎『俗楽旋律考』から小泉理論への橋渡しとして」、藤田隆則・上野正章編『歌と語りの言葉とふしの研究』、京都：京都市立芸術大学、2012年、127-155頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島添 貴美子 (SHIMAZOE Kimiko)

富山大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：00432120

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：